埋め込み節のムードとトコロ節の意味論

山田彬尭
大阪大学大学院 人文学研究科
a.yamada.hmt@osaka-u.ac.jp

1 はじめに

近年の意味論の研究では、接続法／直説法の選択を代表に、埋め込み節のムードの研究が進み、その選択条件についての個別言語間バリエーションに注目が集まっている（Farkas 1992; Villalta 2000, 2006, 2008; Giannakidou 2009; Portner 2018; Faulkner 2022）。日本語は、動詞の屈折ではなく、ト／コト／ノといった補文標識の選択によって、埋め込み節のムードがマークされ、どのような主節動詞がどの埋め込み節を選択するのかということについて研究が蓄積されている。とりわけ、日本語の研究者の関心を集めてきたのが、コト節とノ節の確率的な交替についてである。ノ節が具体的な事象を、コト節が抽象的な命題を指すという傾向が指摘され、この一般化から、(1)に示すように、知覚動詞でコト節の容認度が低いことなどが説明されてきた（Josephs 1976; Kuno 1973; 橋本 1990; 野田 1995；Yamada 2018; Yamada and Kubota 2018; *cf.*, Sode and Sugawara 2023）。

(1)　彼女が宝物を隠した｛の／?*こと｝を目撃した。

しかし、これまでの研究では、(2)のように、知覚動詞と強い共起関係を持つトコロ節が、ノ節とどのように使い分けられているのかという点については、詳細な検討がなされてこなかった（*cf.*, Ikawa et al. 2022）。

(2)　彼女が宝物を隠した｛の／ところ｝を目撃した。

そこで、本研究では、第一に、言語テストを用いた定性的な検証から補文の位置に生起するトコロ節の意味論についての仮説を提示し、続いて、第二に、BCCWJ を用いたコーパスの調査から、ト、コト、ノ、トコロがどのような動詞と結びついているのかという大局的な選択傾向を明らかにし、第三に、提示された仮説がデータと整合的であることを指摘したうえで、最後に、少数の特異的なトコロ節の使用を指摘する。

なお、トコロを用いる構文には下記のようなものも存在するが、補文節を作らないこれらの用例については、本稿では扱わない（寺村 1978；田窪・笹栗 2002；

田窪 2006, 2018; Takubo 2011）。

(3) a. 私がいたところでどうにもならない。
b. ちょうど今着いたところだ。
c. 本当なら今着いているところだ。
d. このところ雨が降らない。
e. ところで、今日時間ある？
f. 山田*（のところ）に行く。

２　データ

２．１　二種類のトコロ節

1 節では、トコロを用いた節を「トコロ節」と一括りに紹介したが、しかしながら、トコロ節と呼ぶべき構文には（少なくとも）次の二つのパターンが存在する（その他のタイプについては後述）。すなわち、場所を指すもの（= (4)）とそうでないもの（=(5)）である。両者は、「場所」などの名詞で置き換え可能かどうかに違いが存在する。本研究では、前者をタイプＡ、後者をタイプＢと呼ぶ。

(4) [彼女が宝物を隠した｛ところ/場所｝]を突き止めた。　タイプＡ
(5) [彼女が宝物を隠した｛ところ/*場所｝]を目撃した。　タイプＢ

この二つのトコロ節は、さらに、以下の点でも相違点を示す。第一は、ノ節との交替が起きるのかどうかという違いである。下記の例を比較されたい。

(6) [彼女が宝物を隠した｛ところ/*の｝]を突き止めた。　タイプＡ
(7) [彼女が宝物を隠した｛ところ/の｝]を目撃した。　タイプＢ

「目撃する」の補部に来るトコロ節は、ノ節に置き換えてもそれほど意味に差が生じない。このため、下記のように$P \wedge \neg Q$の形式に(7)の文を埋め込むと矛盾した文が成立する。これを示したのが(8)である。

(8) *[P 彼女が宝物を隠したのは目撃した]が、[Q 彼女が宝物を隠したところは目撃してい]ない。

これに対して、タイプＡでは振る舞いが異なる。確かに、(6)の「突き止める」という動詞においても、ノ節の生起自体は可能である。しかし、(6)のノにアスタリスクがついているのは、このノがトコロの意味で使うことができないことを

示している。すなわち、(8)と同じように$P \wedge \neg Q$という形式を作成しても、文全体は矛盾したものにはならない。これを示したものが(9)である。

(9)　[$_P$彼女が宝物を隠した<u>の</u>は突き止めた]が、[$_Q$彼女が宝物を隠した<u>ところ</u>は突き止め（られ）てい]ない。

これは、P と Q が指す意味内容が異なる（タイプ A でトコロ節とノ節が交替できない）ことを示している。一方、(6)のノは(10)の文で矛盾律を成立させることから、「場所」ではなく「事実」を表すものだと考えることができる。タイプ A のトコロ節が「事実」の意味で使えないことは、(11)の文から明らかである。

(10)　*[$_P$彼女が宝物を隠した<u>の</u>は突き止めた]が、[$_Q$彼女が宝物を隠した<u>事実</u>は突き止め（られ）てい]ない。

(11)　[$_P$彼女が宝物を隠した<u>事実</u>は突き止めた]が、[$_Q$彼女が宝物を隠した<u>ところ</u>は突き止め（られ）てい]ない。

第二に、二つのトコロ節は、時制の使用についても違いを見せる。下記の例文を見られたい。

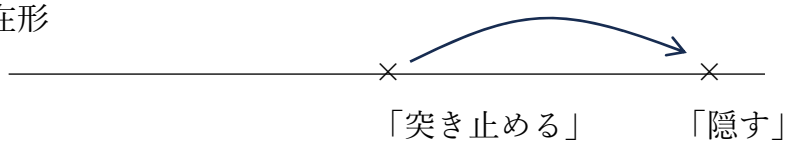
(12)　a. [彼女が宝物を隠す　{ところ/*の}]を突き止めた。　タイプ A
　　b. [彼女が宝物を隠した {ところ/*の}]を突き止めた。

(13)　a. [彼女が宝物を隠す　{ところ/の}]を目撃した。　タイプ B
　　b. [彼女が宝物を隠した {ところ/の}]を目撃した。

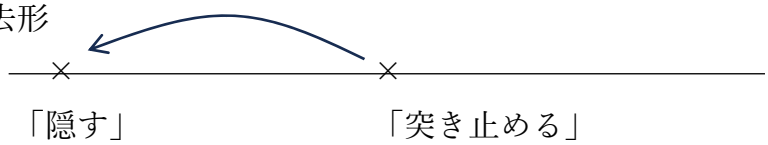
タイプ A では、すなわち、(12)の文では、ル形とタ形の違いが、主節に対して埋め込み節の出来事が先行するのか、後行するのかを意味する。これを図示したものが(14)である。

(14)　タイプ A

a.　現在形



b.　過去形



ル形が使われた場合、「突き止める」出来事が起こった時点において、「隠す」出来事は未然的であるのに対し、タ形が用いられた場合、「突き止める」出来事が起こった時点で、すでに「隠す」事象は成立している。

一方で、タイプ B においては、ル形でもタ形でも意味に大きな差はなく、どちらも「隠す」出来事と「目撃する」出来事の間に時間的オーバーラップがあることが示される。これを図示するなら(15)のようになるだろう。

(15) タイプ B

a. 現在形　　「目撃する」

―――――――――――――――――――――×――――――――――――――――――――

「隠す」

b. 過去形　　「目撃する」

―――――――――――――――――――――×――――――――――――――――――――

「隠す」

とはいえ、両者が完全に同一だというわけではない。タ形では「隠す」出来事が終了する（＝隠しきる）ところまでが含意されるのに対し、ル形では「隠す」出来事の途中であってもかまわないというニュアンスの差が存在する。しかし、いずれの場合であっても、この差は、(14)に見たような明確な先行／後行関係の表示という意味上の対立とは異なるものである。

２．２　タイプＢのトコロ節とノ節の違い

このようにタイプ A とタイプ B のトコロ節には質的に大きな差が存在する。そこで、とりわけ、(4)と(5)で見た「場所」という名詞で置き換えられるのかによる違いがあることから、タイプ A のトコロ節は、トコロ（場所）を修飾する主要部外在型の関係節であり、タイプ B は、ノ節同様、主要部内在型の関係節なのだ、と対比的に捉えることが妥当であろう。

とはいえ、ノ節とタイプ B のトコロ節では以下の点で相違点が存在するという点については注意が必要である。(16)を見られたい。

(16) a. ライオンは[獲物が動かなくなるところ]を狙っている。

b. ライオンは[獲物が動かなくなる　の　]を狙っている。主要部内在型

c. ライオンは[[　e_i　動かなくなる] 獲物]を狙っている。 主要部外在型

(16)a/b のうち、(16)c と意味的に交換可能なのは(16)b のノ節だけである。(16)a

では、獲物が一時的に動かくなる一時的な状態が狙われている。例えば、獲物であるシマウマが、一時的に睡眠をとるために横になっている状況などが想定される。あくまで、一時的に動かなくなることが求められるので、その後、睡眠から覚めたシマウマが再び活動的になることがあってもかまわないという含意がある。

これに対して、(16)b では、(16)c がそうであるように、獲物が動かなくなる状態が完了することが求められる。例えば、老いたり、傷ついたりしたシマウマが絶命するのを待っているという場面で用いられ、上記に述べた一時的に動かない状態になるというような場面では使いにくい。

トコロ節で一時性が必須である点については、トコロ節は「永遠に」という副詞と共起することができないことからも確認できる。

(17) a. *ライオンは[獲物が<u>永遠に</u>動かなくなる**ところ**]を狙っている。
b. ライオンは[獲物が<u>永遠に</u>動かなくなる　の　]を狙っている。

３　分析

Obviation Effect やコト節とは異なる具体性などのノ節の特徴を捉えるために、先行研究では、ノ節は命題ではなく、事象の集合を表すという分析が提案されている。例えば、Yamada (2018)の分析に従えば、(5)のノ節は(18)のように分析される（簡便性を優先し、時制についての取り扱いは無視することとする）。

(18) ⟦彼女が宝物を隠したの⟧
$$= \lambda e.\lambda w.hide(e,w) \wedge AG(e,w,\text{彼女}) \wedge PAT(e,w,\text{宝物}).$$

このノ節の分析を下敷きに、トコロ節の意味論を考えてみることにしよう。第一に、2 節で論じられたトコロ節の一時性という意味が、at-issue 的な意味であるのかどうかについて考えてみたい。

そこで、まず、トコロ節の一時性という意味は主節が否定文であっても保持されるか否かを調べるために、下記の例を考察してみることにしよう。

(19) ライオンは[（*永遠に）獲物が動かなくなる**ところ**]を（は）狙わ<u>ない</u>。
(20) 「ライオンは獲物が動かなくなる瞬間を狙っており」、かつ、「[獲物が動かなくなる前後に獲物が動く状態が存在する]わけではない」
(21) 「[ライオンは獲物が動かなくなる瞬間を狙っている]わけでなく」、かつ、[<u>獲物が動かなくなる前後に獲物が動く状態が存在する</u>]

一時性が at-issue 的意味であり、したがって否定オペレータと相互作用を持つのであれば、(19)は(20)という読みを持ち得るという予測になる。しかし、(20)の読みを意図して(19)を使うことはできず、(19)は(21)を意味することになる。ここから、「獲物が動かなくなっていない状態が、動かなくなっている状態の前にも後ろにも存在する」という情報は否定のスコープには入らないことが分かる。

この一時性が会話の含意によって成立しているとも考えにくい（この一時性に関係する合理的な格律を想定できない）。そこで、この(21)の下線部の意味は、前提や慣習的含意のような（Potts 2005; Potts 2015）意味として扱われることが妥当であろう。ここでは、(22)に見られるように、この一時性という意味が他の前提表現と同じく Plug predicate（Karttunen 1973）によってキャンセルされる性質のものであることを根拠に、前提的意味として分析を行い（ただし、前提と慣習的含意の違いは研究者によって異なることから、詳細については今後の研究にゆだねたい）、トコロ節に対して(23)に示した意味論を提案する（■の後ろの意味は「eが存在量化を受けた時点で前提として生じる意味」であり、at-issue 次元とは明確に区別されている）。

(22) [田中さんが[シマウマが動かなくなる**ところ**]を見たと] 山田さんは**報告**していたが、その獲物は一度として動かなくなることはなかった。

(23) ⟦**彼女が宝物を隠した<u>ところ</u>**⟧ （Version 1 out of 3）

$= \lambda e.\lambda w.hide(e,w) \wedge AG(e,w,\text{彼女})$

$\wedge PAT(e,w,\text{宝物})$ ■eは「宝物を隠す動作が行われた瞬間」である。

第二に、■の後ろの意味はどのように定式化できるのであろうか？ここでは、時間幅（time interval）によって時間を捉える枠組み（Dowty 1979, Ogihara 1996, 2011)に倣い、イベントが起こる瞬間が(24)のように捉えられるという直観を基に、(25)の分析を提案する（I は事象を取って時間幅を返す関数）。

(24) eは「宝物を隠す動作が行われた瞬間」 ＝ eが生じる前の時間幅では宝物を隠す動作は行われておらず、eが生じた後の時間幅でも宝物を隠す動作は行われていない。eが生じている時間幅では宝隠しが実行されている。

	こと	の	と	ところ	合計
思う（五段）	35	3	41,435	1	41,474
言う（五段）	789	2	16,157	4	16,952
	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
聞く（五段）	139	71	923	4	1,137
合計	59,273	7,075	84,613	1,135	152,096

表 1　粗頻度表

	こと	の	と	ところ
思う（五段）	0.1%	0.0%	99.9%	0.0%
言う（五段）	4.7%	0.0%	95.3%	0.0%
	⋮	⋮	⋮	⋮
聞く（五段）	12.2%	6.2%	81.2%	0.4%
合計	39.0%	4.7%	55.6%	0.7%

表 2　相対頻度表 I

	こと	の
思う（五段）	92.1%	7.9%
言う（五段）	99.7%	0.3%
	⋮	⋮
聞く（五段）	66.2%	33.8%
合計	0.0%	0.0%

表 3　相対頻度表 II

(25) ⟦彼女が宝物を隠した**ところ**⟧　（Version 2 out of 3）

$$= \lambda e.\lambda w.hide(e,w) \wedge AG(e,w,\text{彼女}) \wedge PAT(e,w,\text{宝物})$$
$$\blacksquare \forall e'.\forall e''.\begin{bmatrix} I(e') \prec I(e) \prec I(e'') \\ \wedge \neg[hide(e',w) \wedge AG(e',w,\text{彼女}) \wedge PAT(e',w,\text{宝物})] \\ \wedge \neg[hide(e'',w) \wedge AG(e'',w,\text{彼女}) \wedge PAT(e'',w,\text{宝物})] \end{bmatrix}$$

しかし、この(25)の前提の記述では今回の宝隠しの事象以外、「彼女」はそれまで、そしてその後の人生一度も宝物を隠すことがないという強い意味になってしまう。そこで、コンテクストで考えられている時間幅 $\mathbb{I}$ を設定し、(25)に登場する時間幅がすべてこの $\mathbb{I}$ の中の部分集合であるという条件を追加する。

(26) ⟦彼女が宝物を隠した**ところ**⟧　（Version 3 out of 3）

$$= \lambda e.\lambda w.hide(e,w) \wedge AG(e,w,\text{彼女}) \wedge PAT(e,w,\text{宝物})$$
$$\blacksquare \forall e'.\forall e''.\begin{bmatrix} I(e') \prec I(e) \prec I(e'') \\ \wedge I(e') \subset \mathbb{I} \wedge I(e) \subset \mathbb{I} \wedge I(e'') \subset \mathbb{I} \\ \wedge \neg[hide(e',w) \wedge AG(e',w,\text{彼女}) \wedge PAT(e',w,\text{宝物})] \\ \wedge \neg[hide(e'',w) \wedge AG(e'',w,\text{彼女}) \wedge PAT(e'',w,\text{宝物})] \end{bmatrix}$$

４　コーパスによる検証

上記の分析が正しければ、次のトコロ節の使用に関して以下の予測が立ち上がる。第一に、タイプ A については、場所目的語を取る動詞との共起が強いということが予想される。第二、ノ節との共通点として、タイプ B のトコロ節は、事象を補文に取る動詞との共起頻度が高くなるはずである。一方で（世界の集合

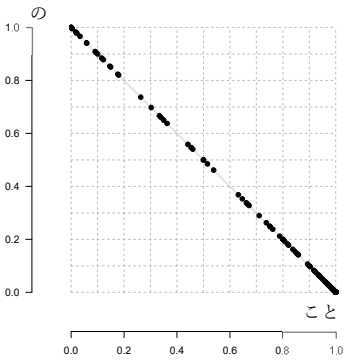


図１　二変数の確率単体

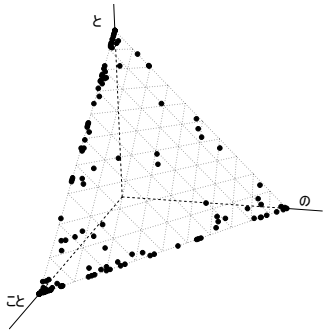


図２　三変数の確率単体

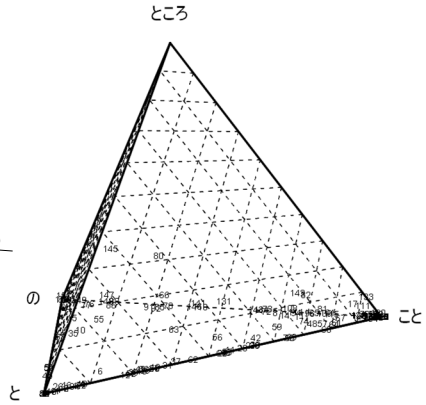


図３　四変数の確率単体

（命題）を表すとされる）コト節と共起する動詞とは共起をしないだろうとも予測される。第三に、ノ節との違いとして、タイプ B のトコロ節は「狙う」に代表されるような事象の一時性を強く前提とする述語とより強く共起することが予想される。

そこで、これらの予測が正しいかどうかを検証するために、BCCWJ から下記のフォーマットで指定される検索式を用いて、用例を採取し、コーパスにおける頻度が 30 以上の動詞について、その分布を観察することとする。

(27) [動詞 / 形容詞 / 助動詞] [と / こと(を) / の(を) / ところ(を)] (は) 動詞 (ている)(ます) [(ん) / (ない)] (です)(た) 補助記号

４．１　確率単体における分布

コーパスにおける検索の結果、私たちは表１に示すような粗頻度表を作成することができる。それぞれの動詞によって総頻度数が異なるため、比較可能性を高めるため、割合を計算したものが相対頻度表である。ただし、相対頻度表に生じる値は、列にどのような環境（今回のケースでは補文標識）を入れるのかによって変化する。例えば、表２はコト節、ノ節、ト節、トコロ節の四種類を比較して作成された相対頻度表であり、図３はコト節、ノ節のみに焦点を当てた時の相対頻度表である。表２では「思う」がコト節を取る割合は 0.1%となるが、表３ではト節が含まれていないため 92.1%という高い値となる。

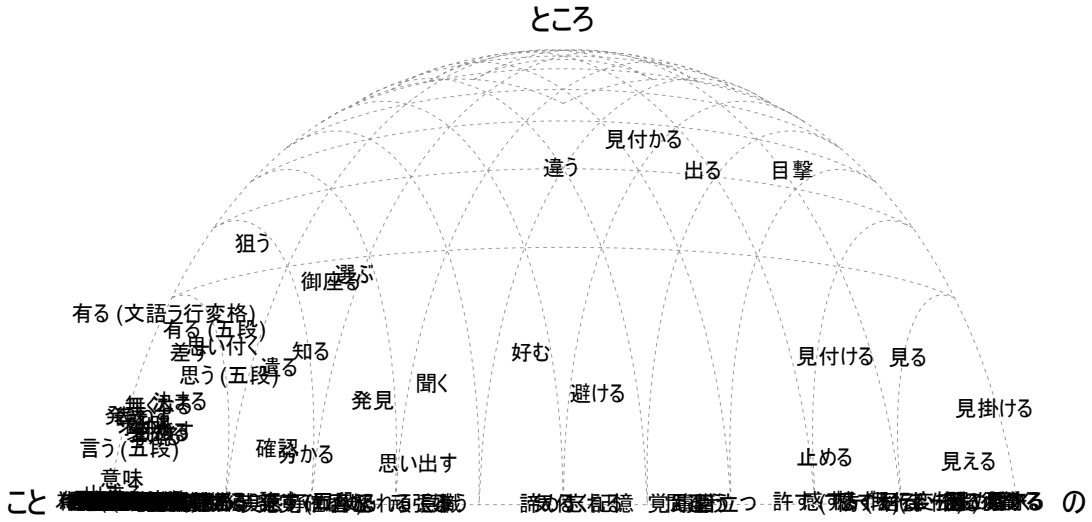


図４　コト節/ノ節/トコロ節を選択する主節動詞

この相対頻度をプロットすることを考える。第一に、コト節とノ節の二つしか検討しないような場合は、*x* 軸にコト節の割合を、y 軸にノ節の割合とし、各主節動詞の位置を丸で示すと、図 1 のような結果が得られる。ここで注目されるのは、データが、一直線すなわち一次元に分布するという点である。これはコト節の割合とノ節の割合を合計すると必ず 1（100％）になるという制約に起因する。

第二に、ト節まで検討対象に入れると、図 2 のようになる。三つの節の割合をそれぞれ *x* 軸、*y* 軸、*z* 軸に対応させるため、3 次元空間が出現するが、実際にデータが分布するのは平面、すなわち、2 次元空間である。割合は 0 未満や 1 より大きくなることはないので、実際の分布は正三角形の内側に限られる。

最後に、コト節、ノ節、ト節に追加して、トコロ節まで対象を広げた場合、それぞれを軸に対応させると、4 次元空間にデータが分布することとなる。しかし、実際には、すべてを足すと 1 になるという上記の議論と同じ制約が働き、データは 3 次元に分布し、かつ、割合は 0 以上 1 以下という制約から、その分布は、図 3 に示すような正四面体の内側に限られる。

一般に、*n* 個の表現の比較をする場合には、データは *n*-1 次元に分布する。これを（確率）単体（simplex）と呼ぶ。5 つ以上の表現になると、データ全体を図示するためには少なくとも 4 次元が必要となるので、これ以上図示することはできなくなるが、先行研究で論じられてきた補文標識がコト節、ノ節、ト節の三つであり、ここで新たに検討対象としたものはトコロ節であるので、三変数の確率単体を考える（5 つ以上の表現を比較する場合は多次元尺度法などで次元縮約をした散布図を利用することになる）。ただし、三次元では奥行きが分かりにくいので、解釈を容易くするため、ト節について除外し、Hellinger 距離に即して空

	こと	の	ところ		こと	の	ところ
見付かる	7 [25.93 %]	13 [48.15 %]	7 [25.93 %]	決まる	108 [94.74 %]	4 [3.51 %]	2 [1.75 %]
目撃	3 [8.82 %]	23 [67.65 %]	8 [23.53 %]	無くなる	115 [96.64 %]	2 [1.68 %]	2 [1.68 %]
出る	5 [20.83 %]	14 [58.33 %]	5 [20.83 %]	発表	64 [98.46 %]	0 [0 %]	1 [1.54 %]
違う	12 [40 %]	12 [40 %]	6 [20 %]	避ける	29 [44.62 %]	35 [53.85 %]	1 [1.54 %]
狙う	18 [81.82 %]	1 [4.55 %]	3 [13.64 %]	表わす	140 [97.9 %]	1 [0.7 %]	2 [1.4 %]
選ぶ	26 [72.22 %]	7 [19.44 %]	3 [8.33 %]	発見	104 [72.73 %]	37 [25.87 %]	2 [1.4 %]
有る (ラ変)	34 [91.89 %]	0 [0 %]	3 [8.11 %]	証明	89 [97.8 %]	1 [1.1 %]	1 [1.1 %]
御座る	256 [75.29 %]	57 [16.76 %]	27 [7.94 %]	求める	92 [97.87 %]	1 [1.06 %]	1 [1.06 %]
有る (五段)	12903 [90.22 %]	633 [4.43 %]	765 [5.35 %]	目指す	112 [96.55 %]	3 [2.59 %]	1 [0.86 %]
思い付く	43 [89.58 %]	3 [6.25 %]	2 [4.17 %]	勧める	116 [96.67 %]	3 [2.5 %]	1 [0.83 %]
差す	91 [92.86 %]	3 [3.06 %]	4 [4.08 %]	考える	254 [97.32 %]	5 [1.92 %]	2 [0.77 %]
見る	20 [5.59 %]	325 [90.78 %]	13 [3.63 %]	言う (五段)	789 [99.25 %]	2 [0.25 %]	4 [0.5 %]
知る	910 [79.41 %]	197 [17.19 %]	39 [3.4 %]	確認	205 [84.36 %]	37 [15.23 %]	1 [0.41 %]
見付ける	13 [14.13 %]	76 [82.61 %]	3 [3.26 %]	分かる	4146 [80.5 %]	988 [19.18 %]	16 [0.31 %]
好む	35 [52.24 %]	30 [44.78 %]	2 [2.99 %]	見える	15 [2.14 %]	685 [97.58 %]	2 [0.28 %]
遣る	91 [83.49 %]	15 [13.76 %]	3 [2.75 %]	止める	65 [17.91 %]	297 [81.82 %]	1 [0.28 %]
思う (五段)	35 [89.74 %]	3 [7.69 %]	1 [2.56 %]	思い出す	349 [67.12 %]	170 [32.69 %]	1 [0.19 %]
聞く	139 [64.95 %]	71 [33.18 %]	4 [1.87 %]	意味	979 [99.69 %]	2 [0.2 %]	1 [0.1 %]
見掛ける	0 [0 %]	54 [98.18 %]	1 [1.82 %]	出来る	27109 [99.9 %]	24 [0.09 %]	2 [0.01 %]

表 4 トコロ節を BCCWJ において少なくとも一例以上伴っていた主節動詞

間を引き延ばした散布図（図４）を用いてその使用傾向を考察する（トコロ節の割合が 0 ではない動詞を取り出したのが表４である）。

４．２　解釈

図４の右側に分布しているものはトコロ節を取り、かつ、ノ節の頻度が高く予測通りのふるまいを示す動詞だといえる。一方で、図４の左に分布する動詞はトコロ節の頻度が高く、かつコト節の使用が高いので、一見すると判例に見えるが、その多くが、タイプ A のトコロ節を取る動詞であることが分かる。ここから先に見た第一の仮説は実証的に支持されたと言えよう。

第二の仮説についても、「目撃する」に代表されるように一時性といった意味が強く感じられる動詞とトコロ節の選択傾向が強く表れていることが浮かび上がっており、提示された仮説はデータと整合的であることが示された。

４．３　今後の課題

4.2 節で見たように、大まかな傾向については本稿の分析が妥当であることが示された一方で、将来より細かい検討が必要な事例を最後に二点取り上げたい。

第一に取り上げたい上記では論じてこなかった事例とは、(28)に示すようなトコロ節の存在である。

(28) a. [易に問いかけてその言う <u>ところ</u>]を聴く　（BCCWJ）
b. [第三身分代表でプロテスタントのラボー・サン＝テティエンヌの語る <u>ところ</u> を]聞こう　（BCCWJ）

「場所」という言葉での置き換えをタイプ A/B を分けるテストとして使ってきたが、これらの用例の「ところ」は「場所」では置き換えられない。しかし、タイプ B とも言い難い。なぜならば、(29)に示すように、このトコロ節を用いた場合、意味的には「言う」事象ではなく、「言う」内容を指す点で、大きくノ節の意味と異なり、むしろ、コト節に近い意味を示すからである。以下便宜上このようなトコロ節をタイプ C と呼ぶこととしよう。

(29) a. 言うのを聞く　⇒　相手が口から音を発しているのを聞く
b. 言うことを聞く　⇒　相手が話している内容を聞く
c. 言うところを聞く　⇒　相手が話している内容を聞く

籾山 (1992)はトコロの多義性を認知意味論の立場から論じ、トコロには「空間的範囲」（と「時間的範囲」）だけでなく「抽象的範囲」の拡張用法があることを指摘しており、(28)に該当する例を、タイプ A である場所的範囲用法から意味拡張によって生じた抽象的範囲用法のトコロとして位置づけている。

もちろん、空間的な概念が抽象的概念にメタファー等を通じて拡張することは一般的な意味変化の方向として広く観察されるところではある。しかし、仮にそうならば、この(28)の事例の持つ古風がニュアンスを有する点を積極的に説明することができない。

むしろ、この構文に古風なニュアンスが付属しているのは、漢文訓読体において用いられた構文から発達したという歴史的経緯に端を発していると考えるべきであろう。漢文訓読の中でトコロ節が登場する場面にはいくつかの類型がある。一つ目は、動詞を名詞化する(30)に示したような用法である。

(30) 富与貴 是 [人之 所 欲] 也。（『論語』）

二つ目は、受け身構文である。古典漢語では受動表現を形成する際、複数の形式が競合をしていたが知られ、春秋戦国時代には、その中に(31)a に示すような構文が存在していたことが観察されている（唐 1987；椿 2004）。

(31) a. NP_1 [$_{PP}$ 為 NP_2]　　V　　「NP_1 が NP_2 に V された」

（例：当知是人、[為 釈迦牟尼仏]、手摩其頭；『法華経』、椿 2004:2）

b. NP_1 [$_{PP}$ 為 NP_2] 所　　V　　「NP_1 が NP_2 に V された」

（例：方術不用、[為 人] 所 疑；『荀子』、椿 2004:3）

そして、戦国時代以降、この(31)a に加え(31)b の構文も発達してきたことが知られている。この(31)b では動詞の前に「所」を置き、動詞が受け身動詞であることが明示的にマークしている（(31)a では Voice がゼロ形式でマークされていると言える）。すなわち、文法的に言えば、日本語の-*(r)are* に該当する形態素の「所」が動詞の前に出現するパターンが生まれてきたと分析することができる。しかし、これらの漢文を日本語で訓ずるときに、「NP_2 のため V せらる」と読む以外に、その漢字表記を尊重して「NP_2 の V するところとなる」と読み下すことで、受け身文の訓読にトコロ節が登場する。

このような漢文訓読という特殊な環境で、外国語との接触や模倣の中で、本稿で論じられたタイプ A ともタイプ B とも異なる第三のトコロ節が生じたと考えられる。これは、Heine and Kuteva (2006)の説くところの文法複製（Grammatical Replication）の一つの事例として理解されるべきだろう。結果、トコロ節には、事象を表すようなタイプ B とともに、命題を表すようなタイプ C 用法も成立しており、この二つのトコロ節の間の関係が、（通時的な視座と共に）将来の研究における緻密な検証の対象となるべきであろう。

第二に取り上げたい将来の研究で深められるべき構文とは、自動詞述語と共起するトコロ節である。これを見るために、下記の例を見られたい。

(32) 私の足{が/*を} 鬼に 見つかった。

この(32)に示されるように「見つかる」という自動詞は、本来ヲ格を取ることはできない。しかし、(33)に示すように、ヲ格を伴ったトコロ節とは共起することが可能であり、ノ節にはないトコロ節の独自性が指摘できる。

(33) 私は、[足がつった{ところ /*の} を] （鬼に）見つかった。

一見すると、これを、次のような付加詞用法のトコロデ節と類似したものと考えたくもなるかもしれない。

(34) a. [角を曲がったところで]、（鬼に）見つかった。
b. [角を曲がったところで]、地面に座った。

この分析が正しければ、付加詞は、動詞の選択制限とは無関係なので、意味的な整合性さえあればどんな動詞とも生起が可能であるという予測になる。しかし、(33)のトコロヲは「見つかる」などの自動詞では容認される一方、「座る」などの動詞では用いることができない。この(34)と(35)の対比から、トコロヲ節は主節動詞の選択に依存することが分かる。このため、完全な付加詞とも考え難い。

(35) a.* 私は、[足がつったところ　を　] 地面に座った。
b.* 私は、[足がつった　の　を　] 地面に座った。

本稿で提示した分析ではこのような特定の動詞との結びつきは予測できないため、このような用例は、将来の課題として認知されなければならない。ただし、本稿の分析の予測が完全に外れているわけでもないことにも注意されたい。(33)の用法も「永遠に」といった副詞との共起は難しく、本研究で論じた一時性という意味が関わっていることは維持されていると考えられるためである。

付録

表 4 に挙げられた主節動詞で、分かりにくいと思われる用法の動詞の BCCWJ における用例を以下に記す。

■ 出る

(36) （以下ネタバレ）確か、ミレーユが仲間の前で夢占いをすると、天空城みたいなところが出る　（タイプ A）

(37) 何度も挑戦するのですが、如何しても必ず塗料が流れてしまうところが出ます。　（タイプ A）

■ 有る（ラ変）

(38) 東京スポーツ系最近、面白さに多少かけるところあり。　（タイプ A）

(39) 余因て感ずる所あり。　（タイプ A）

■ 有る（五段）

(40) 今でも地方によっては別の言葉を使うところがあります。　（タイプ A）

(41) また、意識的に答えてもらっているので、ナチュラルな状況での調査とは言えないところがある 。　（タイプ A）

■ 遣る

(42) そのまた先を考えてできることをやろう?

(43) ＲＩＣ式英文速読速聴講座とかいうのをやりました。

※「遣る」には、下記に見るように、標準語において「だった」となるべきところが「やった」に置き換わってしまったコピュラ用法も含まれている。BCCWJにおいて誤解析に帰せられるべきもので、実際には「ところ」を取る主節動詞とは見なせないであろう。

(44) ガラスにぶつかるとこやった」　（タイプ A）

(45) 船どころか自分の命まで落とすとこやった。　（タイプ A）

■ 思う（五段）

※「思う」には、下記の例に挙げる動詞の項ではないが、たまたま文字列上前節した用例が 1 例紛れ込んでいたが、これは、本稿のトコロ節とは別物として扱うべきであろう。

(46) 国連が、「世界の水没を防ぐためのアイデア」を世界から募集する、と聞いたとき、私は、「アリバイづくりだな」と正直なところ思った。

■ 止める

(47) この地方の人々は鯨を食べることをやめない。

(48) だらだらと考えを長引かせるのはやめましょう。

※「止める」は「止（や）める」「止（と）める」の読みが混在しており、トコロ節を取る一例は漢字表記で「留める」となる下記のタイプ A の事例である。

(49) ボタンの決められたところは留める。　（タイプ A）

■ 出来る

(50) 潮目に偶然に寄る所ができています。　（タイプ A）

(51) どこかで方向、速さとも変化のあるところができている。　（タイプ A）

参考文献

Farkas, D. (1992). On obviation. In I. Sag, & A. Szabolsci (eds.), *Lexical matters*, 85–109. Stanford, CA: CSLI Publications.

Faulkner, T. (2022). The two Spanish subjunctives: the required and default Subjunctives. *An International Journal of Hispanic Linguistics*. 11 (1), 70-100. DOI: 10.7557/1.11.1.6334

Giannakidou, A. (2009). On the temporal properties of mood: the subjunctive revisited. *Lingua* 119, 1883–1908.

橋本修 (1990).「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』第163, 112–101.

Heine, B. and T. Kuteva (2006). *The changing languages of Europe.* Oxford: Oxford University Press.

Ikawa, S., A. Yamada, and Y. Miyamoto (2022). Japanese Clausal Argument Ellipsis and Embedded Clause Periphery. Presentation at Chicago Linguistic Society 58, Apr 22-24.

Josephs, L. S. (1976). Complementation. In Shibatani, M. (ed.) *Japanese Generative Grammar*, 307–369 New York: Academic Press.

Karttunen, L. (1973). Presuppositions of compound sentences. *Linguistic Inquiry* 4 (2), 169-193.

Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

籾山洋介 (1992).「多義語の分析：空間から時間へ」『日本語研究と日本語教育』カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・籾山洋介（編）, 185–199.

野田春美 (1995).「ノとコトー埋め込み節をつくる代表的な形式－」『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版, 419–428.

Portner, P. (2018). *Mood*. Oxford: Oxford University Press.

Potts, C. (2005). *The logic of conventional implicatures*. Oxford: Oxford University Press.

Potts, C. (2015). Presupposition and implicature. In S. Lappin, & C. Fox, (eds.), *The handbook of contemporary semantic theory*, 168–202. Oxford: Wiley-Blackwell.

Sode, F. and A. Sugawara. (2023). Nouniness, factivity and implicative readings: The case of Japanese *wasureru* (‘forget’). Presentation at the 30th Japanese/Korean Linguistics Conference. March 12.

田窪行則 (2006).『日本語条件文とモダリティ』博士論文. 京都大学.

Takubo, Y. (2011). Japanese expression of temporal identity: aspectual and counterfactual interpretation of tokoro-da. *Japanese/Korean Linguistics* 18, 392-409.

田窪行則 (2018).「トコロの多義性を通じて見た言語，認知，論理」『言語研究』154, 1-27.

田窪行則・笹栗淳子 (2002).「日本語条件文と認知的マッピング」『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II：カテゴリー化』大堀俊夫 (編), 135–162.

椿正美 (2004).「六朝訳経の受動表現」『身延山大学仏教学部紀要』5, 1–7.

寺村秀夫 (1978).「『トコロ』の意味と機能」『語文』34（『寺村秀夫論文集：日本語文法編』(1992)収録、くろしお出版）.

唐鉦明 (1987).「漢魏六朝被動式略論」『中国語文』第 3 期, 216–222.

Villalta, E. (2000). Spanish subjunctive clauses require ordered alternatives. *The Proceedings of SALT* 10, 239-56. CLC Publications, Ithaca, NY.

Villalta, E. (2006). *Context dependence in the interpretation of questions and subjunctives.* PhD Dissertation. Tübingen.

Villalta, E. (2008). Mood and gradability: an investigation of the subjunctive mood in Spanish. *Linguistics and Philosophy* 31(4): 467–522.

Yamada, A. (2018). A Modal Approach to *no*-clauses in Japanese『日本言語学会第 156 回大会予稿集』, 145–150.

山田彬尭・窪田悠介 (2018). 「ノとコト再考: 主文述語の新たな意味分類に向けて」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』, 276–281.